

H29年度自己評価結果公表シート

幼保連携型認定こども園亀之森幼稚園かめのもり乳児園

1、本園の教育目標

一人ひとりの子どもの発達過程や個性を把握し、こども園において最適な人的物的環境を常に考え、子どもたちの生活の場としての環境も整え、自立して生きていくための基礎となる力を培う。

- ・自立、共感のバランスが取れた子ども
- ・コミュニケーション能力があり、協同することができる子ども
- ・日常的な自然との関わりを通して、感性豊かな子ども
- ・食の楽しさ・大切さを実感し、心身とも健康な子ども

2、平成29年度、重点的に取り組む目標・計画

幼保連携型認定こども園として初年度であることを意識して、今の子どもに必要な経験を考え、教育・保育・子育て支援の全体的な計画を立て、教職員間や保護者の共通理解をはかる。特別支援教育については、一人一人の子どもの特性に合わせて個別の指導計画を立て実施する。完成した新園舎をより良い保育に適した施設になるように使い方や室内環境構成を考える。食育について研究する。0～2歳児の育児担当制の保育を細部に渡り検証して充実させる。

3、評価項目の達成及び取組状況

評価項目	取組状況と評価
幼保連携型認定こども園として、今の子どもに必要な経験を考え、教育・保育・子育て支援の全体的な計画を立て、教育・保育課程の編成をして、教職員間や保護者の共通理解をはかる。(継続)	長年実施してきた教育保育課程であっても、今の子ども達にとって有意義な保育であるかを常に教職員間で話し合っている。一方で教育保育課程のねらい等を教職員間でしっかりと共通理解しているかを常に意識する必要がある。また、教育保育課程を変更する場合、その目的ねらいを保護者に理解できるようにしっかり伝えることができるかが課題としてあがっている。
特別支援教育を一人一人の子ども特性に合わせて個別の指導計画を立てて実施する。(継続)	認知行動療法の学識専門家やカウンセラー、また、池田市発達支援課との連携を深め、個別の指導計画を立てて特別支援教育を実施した。その子の特性に則した指導計画を立てやすくなった。保育教諭間の連携も徐々に深まってきた。家庭との連携については、認知行動療法専攻のカウンセラーが大阪府事業のキンダーカウンセラーとして機能するようになり家庭との連携が密になりつつある。各市町村との連携も深まってきた、個別支援計画も含め小学校、各種専門機関との連携も密になりつつある。

平成29年3月に新園舎が竣工したが、実際に使用を始めて、より良い保育に適した施設になるように詳細を立案する。	平成29年4月より新園舎の全面使用を開始した。利便性の追求に偏らず子どもの発達に良い施設を目指すことを視野に入れて詳細な部分の使い勝手を検証しているが、財政的な問題もあり、具体的な改善にまでは至っていない。
食育(継続)	イチゴ、サツマイモ、夏野菜等を園庭内の畑にて栽培して食した。園庭内に畑があることで、日常のお世話や観察が無理なくできた。収穫したものは調理室と連携して調理保育でも使用した。毎日の給食で使用する食器、スプーン、フォーク等を子どもの発達に合わせて細部にこだわり取り揃えた。
幼保連携型こども園として0～2歳児の適切な保育計画を立て実践する。	一人一人の子どもに合わせた育児担当制の保育で一人一人の日課を定めて、子ども達の情緒が安定して、落ち着いて過ごせる保育を目指し、実践できた。開園初年度ということもあり、受け入れる子どもの数を少なめに抑えたが、定員の子どもを受け入れても同様の保育を実践できるように環境を整える。

4、学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

改めて園の教育・保育課程や活動内容を教職員で振り返り、自己評価することで、保育の方向性や課題を客観的に整理して考えることができた。ただ、教育保育課程にしても、活動内容にしても、あくまで、それは手法であり、最終評価は子ども達が園生活を通じてどのような人に成長することができたかである。論に溺れず、しっかり子どもの姿を見ていきたい。

5、今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
幼保連携型認定こども園として、今の子どもに必要な経験を考え、教育・保育・子育て支援の全体的な計画を立て、教育・保育課程の編成をして、教職員間や保護者の共通理解をはかる。(継続)	今の子ども達にとって有意義な保育であるかを常に保育者間で話し合うとともに、保育内容や保護者からは見えにくい教育保育課程のねらいをいかに保護者が理解しやすいように伝えるかを検討する。教育課程のみならず、保育標準時間の過ごし方や子育て支援についても検討する。
特別支援教育を一人一人の子どもの特性に合わせて個別支援計画を立てて実施する。(継続)	行動療法の学識専門家やカウンセラーや各市町村の専門家との連携を継続し、大阪府のキンダーカウンセラー事業を活用し、専門家と保護者の連携を深めるコーディネートも継続していきたい。また、教育課程にそった保育活動の中で、個別の指導計画がより生かされることを考える。

<p>平成29年3月に新園舎が竣工したが、実際に使用を始めて、より良い保育に適した施設になるように詳細を立案する。子どもが落ち着いて集中して遊べる環境構成を研究する。(継続)</p>	<p>平成29年4月より新園舎の全面使用を開始した。利便性の追求に偏らず子どもの発達に良い施設を目指すことを視野に入れて詳細な部分の使い勝手を検証する。室内環境の研究のみならず、戸外環境、人的環境も研究する。</p>
<p>食育(継続)</p>	<p>食物を栽培する楽しみを感じながら、収穫をし、食することで、野菜等苦手な食物が少なくしていきたい。自園調理給食を開始され、楽しく食が進むための環境を考える。</p>
<p>幼保連携型こども園として0～2歳児の適切な保育計画を立て実践する。</p>	<p>一人一人の子どもに合わせた育児担当制の保育で一人一人の日課を安定させて子ども達が情緒が安定して落ち着いて過ごせる保育を目指す。</p>

6、学校関係者の評価

学校関係者評価については、現在、努力義務とされているが、本園ではまずは自己評価の充実をはかっている。学校関係者評価については、形式的にならず、しっかり機能するように時期を見て、学校関係者評価委員会を立ち上げたい。

7、財務状況

公認会計士西野吉隆の監査により、適正に運営されていると認められている。